●中部

伊藤 美由紀

愛知県クラシック音楽界での大きなニュースは，愛知4大オーケストラ・フェスティバルの第1回公演が開催されたことであろう。愛知県下を代表する4つのプロオーケストラである名古屋フィル，中部フィル，セントラル愛知，愛知室内オケによりブラームス全交響曲が8月31日に演奏された。当初，中部フィルの指揮は芸術監督である秋山和慶の予定であったが急逝により竹本泰蔵に変更。他3団体は各々の音楽監督，川瀬賢太郎，角田鋼亮，山下一史による指揮。愛知県芸術劇場コンサートホールは満席で，各々の団体が実力を発揮し質の高い演奏で観客を魅了し，最後の第4番まで観客が減少することなく大成功を収めた。通常の定期演奏会に比べて若年層の観客が多くみられ今後の継続が期待される。

名古屋国際音楽祭のオープニング・ガラ・コンサートは，例年に続き名古屋フィルと川瀬賢太郎を迎えて国際的に活躍する2名の若手ピアニスト，愛知県出身の田所光之マルセルと福間洸太朗とともにピアノ協奏曲に焦点を当てる。7月までに庄司紗矢香（ヴァイオリン），山田和樹（バーミンガム市交響楽団音楽監督），HIMARI（ヴァイオリン）を含む国内外で注目の演奏家たちによる全6公演が開催された。

愛知県芸術劇場自主事業では，上述の愛知4大オーケストラ・フェスティバル（8月）を含み，次の4点は現代作品に焦点を当てた個性的でユニークな内容による公演となった。演劇作家・小説家の岡田利規と作曲家の藤倉大のコラボ作品である音楽劇『リビングルームのメタモルフォーシス』（3月），竹下景子（特別ゲスト）の語りを含み，愛知県出身の八木美知依・作詞作曲による箏，歌，エレクトロニクスを含んだ独自の箏世界を築き上げた『八木美知依・箏の世界・音と声』（11月），久保田晶子（薩摩琵琶），丹下聡子（フルート）迎えて愛知県在住の作曲家3名，伊藤美由紀，水野みか子，倉地佑奈の新作を含んだプログラムによる『ニンフェアール第21回公演「枯淡の美」～薩摩琵琶とフルートによる』（11月），M.エアハルト（アルパ・ドッピア），小原道雄（チェンバロ）を迎えて，愛知県在住の作曲家・今井智景によるプロジェクト『Crossboundary XIII ～ルネサンス・ハープの革命「DIMINUTIONS」』（12月）である。例年力を入れているパイプオルガンイベントとしては，オルガニスト養成事業，オルガニストの山田由希子，勝山雅世，小林英之，湯口依子らによる公演を含んだ６イベント。

今年度の名古屋市民芸術祭の音楽部門の参加団体としては，『江頭摩耶（ヴァイオリン）・フィンランドの音楽風景-トゥオマス・トゥリアーゴを迎えて』，『戸谷誠子ピアノリサイタル』，『トランペッター大和・儚音』，『Duo Aurea・Donna Onna歌曲でたどる女性作曲家の旅』，『レーベインムジーク秋の芸術祭・室内楽で贈るクラシック名曲スペシャルコンサートvol.3』，『ニンフェアール第21回公演・枯淡の美』，『クール・ジョワイエ演奏会』，『吉田文パイプオルガンリサイタル』，『小さなオペラ・木の匙』の名古屋市内で活躍する9団体/個人が選ばれ10-11月に開催された。

名古屋フィル定期『喜怒哀楽』シリーズ，1月は，ロベルト・フォレス・ベセス（指揮）により小出稚子（コンポーザー・イン・レジデンス）／へび（初演），カミーユ・トマ（チェロ）によるサン＝サーンス／チェロ協奏曲第1番を含む。川瀬賢太郎によるマーラー／交響曲第6番『悲劇的』（2月）は，同プログラムによる東京公演も完売により大成功を収める。シーズン最後『喜怒哀楽の街』（3月）は，ウェイン・マーシャル（指揮・ピアノ）により得意とするガーシュインに焦点を当てたアメリカプログラム。4月からの新シリーズ『肖像』は，川瀬とともに3名のソリスト角野隼斗（ピアノ），石若駿（ドラムス），マーティ・ホロベック（エレキベース）を迎えてジャズの要素を含んだグルダ／コンチェルト・フォー・マイセルフなど，全席完売で開幕。90歳を迎えるジャン＝クロード・カサドシュ（指揮）と孫のトーマス・エンコ（ピアノ）による共演（5月），6月は広上淳一（指揮）により彼の師である尾高惇忠の作品に焦点を当てる。7月は若手指揮者・エミリア・ホーヴィング，ヨルゲン・ファン・ライエン（トロンボーン）を迎える。川瀬により青木涼子（能声楽）を迎えて小出稚子／ JUNCTIONの初演（9月），トーマス・ダウスゴー（指揮）によるブルックナー／交響曲第8番（10月），小泉和裕（名誉音楽監督）によるショスタコーヴィッチ没後50年記念（11月），ジェフリー・パターソン（指揮），上野通明（チェロ）によるミャスコフスキー／チェロ協奏曲など（12月）と内容の濃い充実した定期が揃った。その他，市民会館名曲シリーズ『ベートーヴェンPLUS』はベートーヴェン交響曲2曲ずつを含んだプログラムにより各指揮者による個性的なプログラムで4公演，子供向けの『こども名曲コンサート』も好評であった。

セントラル愛知定期の今期のテーマは『ロマンティック・

セントラル』。角田鋼亮によるシーズン最初は，周防亮介（ヴァイオリン）を迎えて，コルンゴルド／ヴァイオリン協奏曲ニ長調を含む『ロマン主義の拡張』（4月），『マーク・マスト（指揮）の“悲愴”』（6月），宮田大（チェロ）を迎えて『重ねあう想い』（7月），下野竜也（指揮）による『渾身のブルックナー』（9月），ニコライ・クズネツォフ（ピアノ）を迎えてハンソン／交響曲第2番を含む『アメリカのロマン主義』（11月）。馴染みのない作品も取り入れながらロマンティックな作品による興味深いシリーズとなった。

中部フィル定期の第100回公演は，1月に逝去した秋山和慶（芸術監督）氏に捧げられた「追憶のアダージェット」をテーマに大植英次（指揮），北川千紗（ヴァイオリン）によりコルンゴルド／ヴァイオリン協奏曲と，マーラー／交響曲第5番で追悼の意を示した団員の心のこもった公演となった。

愛知室内オーケストラ定期は，舘野泉（ピアノ）による色彩豊かなエスカンデ／左手のためのピアノ協奏曲を含んだシーズン最初（4月）は，山下一史によりベートーヴェン交響曲第1番，7番で幕を開けた。5月は，来年度続編があるという権代敦彦（コンポーザー・イン・レジデンス）／空の裂け目からの初演を含む。原田慶太楼（指揮）によるコリリアーノ／打楽器のための協奏曲の日本初演を含んだ7月公演，出口大地（指揮）によるショスタコーヴィッチに焦点を当てた9月公演，原田慶太楼による「洗練のきわみ」（10月），「名匠ユベール·スダーンによる真髄を究めた解釈」（11月）を開催した。

その他，音楽クラコ座vol.13「ゆがむ共振・アナセンの視えるオンガク」（2月），加藤訓子プロデュース『STEVE REICH PROJECT』（6月），加藤訓子『バッハを弾く』（7月），電子音楽による『ミッドジャパン音の芸術祭2025』（8月），『くりもとようこ音の個展X / 弦・紘祭り』（10月），『窪田健志打楽器リサイタルvol.6』（11月），『奥村晃平（バリトン）·ブラームスの歌曲スペシャルリサイタル』（11月）など，愛知県と繋がる音楽家たちによる継続的な意義のある公演も多数開催された。

伊藤美由紀（いとう・みゆき）
コロンビア大学（ニューヨーク）で作曲をトリスタン・ミュライユに師事，博士号を取得。文化庁芸術家在外研修員としてIRCAMにて研鑽を積む。ニンフェアールの代表として自主企画公演を定期的に展開し，第14回佐治敬三賞，名古屋市民芸術祭特別賞「クリエイティブ企画賞」を受賞。国内外で作品の発表を続け，千葉商科大学などで後進の指導にあたっている。
http://www.miyuki-ito.com/Miyuki_Ito/Home.html